

---

# 青の住人

南河紅狼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青の住人

### 【Nコード】

N9815W

### 【作者名】

南河紅狼

### 【あらすじ】

隕石の落下により、全大陸が水没した地球。隕石とともに飛来したアカシャと呼ばれる微生物によって汚染された海。

シロイルカの中に記憶を移植して生き延びていた旧時代の少女カチは、人の姿となって地上世界へと打ち上げられ、月系地球人と異星人との間に生まれた青年、まてお真朱とであい……

遠未来、海洋SF

深い青が広がる海は様々な音に侵食され、緩やかなうねりと反比例して慌ただしく、ひどく賑やかだった。

海中を泳ぎまわるヒレを持った哺乳類、クジラやイルカたちの歌声は甲高く、重厚に何処までも広がっていく。幾億ともしれぬ魚たちの群れが蹴り上げる水音は、河のせせらぎを連想させる儚さを響かせていた。

それらの音に負けじと、急速な変化を続ける海底は燃えたぎる炎のような泡を吐き出し、獣の咆吼を思わせる唸り声を響かせていた。地球が水の星と謳われた由縁でもある、かつて世界の約七十パーセントを占めていた母なる海は現在、全ての大陸を飲み込み、異常なまでの包容力を世界に誇示している。

言葉のとおり、水の星と化した、地球ならぬ“水球”の主な生活圏である海には、音だけではなく、様々なものが存在している。

かつて、大陸を我が物顔で支配していた人類が築きあげた、巨大な建造物の残骸も、その一つだ。

巨大な隕石の衝突から引き起こされた、世界規模の大地震による大陸破壊。

それに伴って、海底の地形も大幅に変化し、深い海の底に眠っていたメタン・ハイドレート層の不安定化により大気中に大量のメタンが放出され、地球温暖化は一気に加速し、大地を容赦なく灼いた世界。とりわけ人類社会は、再起不能なまでの打撃を被った。

輝かしい歴史は、温暖化が引き起こした超規模のハリケーンによって薙ぎ倒され、大津波によって無数の命と共に為す術もなく海に飲み込まれて、消えた。

深さを増した海に飲み込まれた過去の栄光のほとんどは、メタンを吐き出しながら移動を続ける海の底へと、今もなおゆっくりと喰われ続けている。それはまるで、傍若無人に振る舞っていた人類へ

の見せしめのようでもある。

塵が積もり、柔らかそうな海底から突き出している、くすんだ橙色と白い鉄骨で組まれた尖塔も、そんな文明の憐れな墓標のひとつだ。

大災厄のときの衝撃により、所々が歪み、へこんでいる尖塔の表面には、グロテスクなフジツボが鱗のようにびっしりと張り付き、イソギンチャクが気怠げに揺れていた。

長い間に浸食されていった塗装はめくり上げられ、ごわついた錆さえ浮かんでいる。大気に触れ、日の光に照らされていたときの美しさは微塵も残ってはいなかった。

その尖塔……かつては東京タワーと呼ばれた遺物の周囲で、深い海の底からぼんやりと光るように浮きだつ、眩い閃光が翻る。

シロイルカだ。

クジラ目ハクジラ亜目イツカク科の、シロイルカ属に属する生物。クジラとイルカの境界は曖昧で、大きさを基準として分類されている。体長五メートルほどのシロイルカは、その名に反してクジラに分類される生き物だ。

ずんぐりと、丸みをおびた体躯には背びれがない。冷えた海水の中で過ごすために分厚くつくられた青白い皮膚は、濃い海の中では光り輝くように美しい。

他種族に比べて遙かに柔らかい脂肪層がつくりだす、絶えず微笑んでいるような愛らしい姿をしたシロイルカたちは、十二頭からなる群れを構成して騒々しい海を泳いでいた。

その群れの中の一頭、周りを取り囲む成体とは一回りほど小さい体躯のシロイルカであるカチは、群れから一人飛び出て、今さっき通り過ぎたばかりの、固着生物の巣となり果てた東京タワーの周囲をぐるりと回った。

カチは、頭部のほぼ中央にある、丸くこぶのように突き出た脂肪組織メロンから、海のカナリアとも呼ばれる、自慢の美しい高音の声を仲間たちに向かって響かせた。

黙々と先を急ぐ仲間たちは、うねる海水を掻き分けて伝わるカチの声に泳ぎを止めた。同じように額から声を震わせ、否と応える。

若いゆえに好奇心が強いカチとは違い、大人の分別を持つシロイルカたちは、本能に書き込まれた旅を続けるほうが重要らしい。

カチは不満げに下顎を突き出して、首を左右に振った。自然物で形作られた景色の中に忽然と存在する異物は、長い旅に飽きてしまっていた気持ちを引きつけてやまない。

もつと見ていたいと、更にカチは東京タワーの周囲を泳ぎ回った。だが、大人たちは子供心のぬけない行動を馬鹿にするように、無視して泳ぎ始めてしまった。

霧に飲まれるように徐々に消えてゆく群れの姿に、カチはうろたえた。はぐれてしまつてはたまらないと、尾びれで海水を蹴る。

それでも名残惜しさを消しきれないカチは、小さな黒い瞳で、頂上の針だけが真つ直ぐと突き立つ東京タワーを見下ろし、動きを止めた。こぼつと小さな音を立てて背中から空気が零れる。

海底をじつと見つめるカチの表情は相変わらず微笑んではいる。だが、漆黒の瞳には、僅かに警戒の色が見て取れた。

カチは気づいたのだ。深いばかりの海の底にひっそりと潜むものを……もしくは、この海に満ちる確かな意志が。

仲間たちの姿が完全に見えなくなつても、動くことができないカチの顔に、白く濁つた泡が飛び込んでくる。

一つ二つと、滞留する塵を吹き飛ばして海面へと昇つてゆく泡は、呆然としている間にもどんどん勢いを増していく。カチが危険を感じたときには、既に身動きすら恐ろしいほどの量に囲まれてしまっていた。

カチは泡から逃れようと必死になつて胸びれと尾びれをばたつかせた。だが、全ては、もう遅い。

吹き上がる白い泡は、それ自体が意志を持つようだった。逃れようとくねるカチの体を瞬く間に拘束していったのだ。

ずるりと、ものを引きずるような地響きが海水を震わせた。

はつとなつて、カチは額から音波を放ち、周囲の状況を探る。下、つまり今の今まで塵の積もっていた場所に大きな空洞が形成されているのが感知できた。

泡に絡め取られながら、カチはぞつとした。自身の体の何倍もあるような東京タワーが丸ごとなくなつてしまつているのだ。

ただならぬ恐怖を感じ、カチは仲間たちに助けを求めようと更に声を響かせた。だが反応は全くない。聞こえてくるのは、沸きだつような泡の音ばかりだった。

そうしている間にも、止まることを知らない無数の白い泡は海面へと伸びる柱となつた。海水を浸食し、浮力を消去していく。

そうなれば当然、カチはなすすべもなく 悲鳴すらも上げることとできずに深い海の底へと引きずり込まれた。

いや、むしろ“落下していった”と表現すべきなのかもしれない。東京タワーが埋没したことであつた大穴へとさらに落ちていったカチは、黒く濁る水底へと勢いよく引きずり込まれていく。

揺らぐ海面から射し込んでくる太陽光が急速に遠くなり、世界を満たす音さえも掠れ、何もかもが分からなくなつてしまふ。

ようやく落下が落ち着いたころ、辺りは漆黒に閉ざされていた。とはいえ、もともと視力を頼りにしてないカチには関係がない。

必死になつて平静を保ちながら、帰路を探るべく、広い海の中に音波を投げ込む。

いくら海洋生物であるとはいえ、肺呼吸をしている以上は息継ぎが必要だ。

体中の血に溜め込んだ酸素が無くなつてしまえば、海を自由に泳ぐシロイルカとはいえ、溺死してしまうだろう。

『……百十一番ポット、システム解除準備中』

深い海の底。崩れ落ちた岩の重たい震動が響く中で、カチは聞いた記憶のない音を感じ取つていた。

それと同時に、放つた音の反響の具合で、周囲は洞窟状になつているのがわかつた。堅い岩盤で囲まれているようだ。これ以上、崩

れることは無いだろう。

カチはとりあえずほっとして、まるでクジラの腹の中のような巨大で閉鎖的なこの空間に、大きな建造物があるのに気づいた。

不可思議な声は、洞窟の半分を満たすほどの建造物の中から響いているようだった。

今まで遭遇した記憶がないほどの存在感に、カチは戸惑いを覚えた。生物でないという事実だけは理解できた。しかし、それ以外のことは、なにもわからない。

『覚醒シークエンス終了』

無感情に響く声に引き寄せられるように、カチは恐怖心を忘れて巨大な……ドーム型の建造物へと近寄っていった。

『おはようございます』

カチの体よりもなお白い壁に分厚い唇の先をつけたのと同時、タイムリングを見計らったように投げかけられる音にカチは全身を流れる血に火が灯るような熱を感じた。

まったく聞いたことのない音。それなのに、知っているような錯覚。そう、これは「声」だとカチは思った。覚醒を促す優しい言葉だ、と。

『お目覚めはいかがでしょう？ 体調に変わりはないでしょうか。この旅が、あなたの心の癒しになれば幸いです。またのご利用をお待ちしております』

がたん。と、何かが動いた。

閉ざされた海水の中を振動して広がる音が自分の中から響いていることに気づき、カチは悲鳴を上げた。

小さな心臓が激しく脈打ち、長時間の潜水に耐えられるように蓄えられていた酸素が、遂に消失した。

急速に掠れてゆく意識の中で、状況を一切無視した儀礼的な機械音声が告げる。

『それでは、行ってらっしゃいませ。あなたの、世界へ』

消えてゆく意識の中でカチは、祝福と思われる言葉をぼんやりと

聞いていた。



空と海の境界を示す水平線に、夕日が沈んでゆく。

いかなる時も、穏やかな波は太陽の熱に焦がされるように橙色に染まり、水面の動きに合わせて星のように瞬いている。

浮体ブロックを繋ぎ合わせて造られた、八万三千平方キロの人工浮島　隕石の衝突による津波によって沈んだ日本の一部、北海道とほぼ同じ面積　を飾るビル群のソーラーパネルは、暗くなり始めた街を照らすため、蓄えた電力を島中に送り始めた。

昼でも肌寒い季候の現地球は、夜になれば、吐く息が白くなるほどに冷える。

人工砂を敷き詰められた仮初めの海岸に立っていた真朱は、まくつていた袖を下ろした。

光沢のある白い生地に、青と黒のラインがバランス良くプリントされているジャケットは、水族館の飼育員のようで、あまり好きにはなれない。

もちろん、真朱の仕事は飼育員ではない。

国際機関に所属していることを表す、左胸に刺繍されている旧地球と流れ星がデザインされたマークが身分の証拠だ。

真朱の着るジャケットには、波を表す紋様が組み合わされている。海に覆われた世界の中に潜む命を守る、環境保護機関のものだ。

真朱は風に当てられていた頬を軽く撫でた。ざらざらとした感触は潮と、不摂生を強いられる仕事のおかげで伸びてきた髭のせいだろう。早く顔を洗って髭を剃りたいと胸中ではやきながら、眼前に迫るような近い空を見上げた。

背後には近代的な街並みと、土星の輪のように地球を一周する宇宙ステーションのおぼろげな曲線が広がっている。

宇宙ステーションから一直線に伸び、人工浮島を突き破って地底の岩盤へ突き刺さっている柱は軌道エレベーターだ。人工物だらけ

の殺風景な社会を象徴するような、無機質な表面に真朱は嘆息した。この世界に生み出されてしまった、自然とは異なるもの。誇るべき技術の粹も、真朱からすれば異物でしかなかった。

しかし、そんな真朱の胸中ごと、人類が作り出した全ての人工物を嘲笑うかのように、目の前に広がる海原は恐ろしいほどに雄大だった。その存在感には、畏怖を覚えずにはいられない。

変革を通り過ぎた地球は、自然物に満たされ過ぎてている。巨大な機械がいくら地球を取り囲もうと、海がその雄大さを失うことはないだろう。

真朱は喉の奥から迫り上がってくる不快感に唾を吐いて、柔らかい砂を踏みしめて歩き出す。

「ノート・リン・ドウルーツォ・アルビレグム施設長、予定の時刻だ。行動を開始する」

少しくせのついた短い黒髪と、同化しているような黒いヘッドセットに付いているマイクを口元へと引き寄せて報告した。

すると、すぐに甲高い女の声が返ってくる。

『了解。こちらでも微弱ではあるけど、脳波を感知しているわ。確かな座標はわからないけれど、おそらく目標は、その近くにいますよね。オルカ・オフシヨアの予言は大当たり。なにか、ご褒美を考えたあげなくちゃね!』

「反対はしないが、協力もしない。盛り上がるんなら、俺抜きでやってくれよ。俺ははやく仕事を終わらせて、きちんとしたベッドで眠りたいんだよ」

不機嫌たらたらに文句を言って、真朱は凝り固まった背中に手を当てて軽く伸びをする。

「車のシートは柔らかすぎて寝付きがわるい。最悪だ」

『堅ければ堅いで、文句を言うでしょうに！ わがままね』

甲高い声が、耳全体を覆うヘッドフォンから叩き付けられる。

「声がでかい。鼓膜が破れたらどうする？ 労災なんか出ないんだぞ」

『煩いわね』

文句は数回の咳払いでやり過ぎされ、ノートは再び真面目な声になって話を続けた。

『波形からして、一週間前に打ち上げられたシロイルカの記録と同一のもののようなね。恐らく、これは……』

「本体か？」

『ええ』

迷いのない肯定の返事に、うんざりと肩をすくめる。真朱はヘッドフォンをコツコツと指で叩きながら、半分が海に消えた太陽を睨み付け、苦々しく舌打ちをした。

「まったく、厄介だ」

『そう？ 私は一週間前に擬体が打ち上げられてから、ずっとこの日を楽しみにしていたけれど？』

「不謹慎だな」

『貴方に言われたくないわよ。それよりも、目標の保護を急いで。連星政府の新造艦が完成したのは、あなたも知っているでしょう？』

「ああ、知ってる。新型の思念遮蔽システムを搭載した潜水艦だろ。名前は、確か……イサナだったか」

『高精神汚染深層域まで潜ることができるわ。制限時間付きではあるけど』

「俺のフリッパー並の高遮蔽率だな」

緩やかな水面をじっと見つめて、真朱は口笛を吹いた。

「まあ、二人乗りの小型艇と比べるようなものでもないか」

『ともかく。それを狙って、旧人類解放同盟の活動が過激になっているの』

「俺たちの目標も狙われているかもしれない、と？」

『可能性は、なきにしもあらず、よ。もちろん、機密情報の管理は徹底させているから、大丈夫と保証してあげられる。それでも、用心に越したことはないでしょ』

「備えあれば、憂いなし。備品には、おあつらえの面倒な仕事とい

うわけか」

真朱は肩をすくめ、海岸線に立つ。寄せて返す波が、編み上げのブーツの表面を濡らす。耐水処理はされているが、濡れるのはあまり気持ちの良いものではない。

『反応が近くなつたわ。真朱、もうすぐ現れるわよ!』

子供のようにはしゃぐノートに、真朱は苦笑を漏らす。

「わかつている。くそ寒いのに、二日前から、ここに張ってるんだ。お望み通りに、連れて帰ってやるさ」

緩やかな波のうねりの中に僅かな変化を見て取って、真朱は身構えた。

「なんだ? でかいぞ?」

海鳥のいない海岸に、雷鳴のような轟音が響き渡る。

波を押し上げ、弾き飛ばし、深い海の底から勢いよく迫り上がってきたのは、銀色が美しい、長方形の箱だった。

窓もなく、装飾もまったくない箱は、飛び出してきた勢いそのまま一回転した。まるで、海上を跳ねるクジラのようなうだ。

橙色の太陽光を、のっぺりとした表面に反射させながら、箱は柔らかな人工砂へと沈んでいった。

『どうしたの真朱! まさか、同盟の妨害に?』

「……そう興奮するなよ、慌てることはない。ついでに言えば、情報管理もしっかりしているようだな」

『どういう意味よ!』

「問題ないってことだよ。目標は予定通りに到着した……救命ポッドらしきものに乗ってな」

『なんですって!』

音割れするほどの甲高い声に、真朱はヘッドフォンを摘んで遠ざける。あまりの大声に、冗談ではなく本当に鼓膜が破れてしまいうだ。

『本当に? 本当に、救命ポッドに乗って地上に現れたのね!』

「嘘を言って、舌を抜かれたくはないからな。誓って、見たままを

報告する」

真朱は耳を擦りながら、大きな箱へと歩み寄った。

「小型の救命ポッドだ。救難信号および、生体反応も確認。窓がないから中を確認することはできないが、今日、この海岸に打ちあげられてくる予定の個体であることに間違いはないだろう」

自分の背丈ほどもある巨大な箱をまじまじと見つめた。箱の底についている、推進装置であろうスクリューがなければ、まるで棺のようだと真朱は思った。

材質を確かめるために、真朱は右手の手袋を剥ぎ取った。

右手は、ぞつとするように冷たくガラスのように滑らかな感触を捉えた。

打ち上げられたばかりとあって、まだ表面は、しっとり濡れている。

沈みつつある夕日に雫が光る様子は美しかった。その中に人が入っていると知っていなければ、部屋に持って帰りたいくらいだ。

「救命ポッドで打ち上げられるとは、珍しいな。まあいい、これから回収作業に入る。救命ポッドのまま移送するから、受け入れの準備をしておいてくれ」

『任せておいて』

真朱はポッドから離れて手袋をはめ直した。

タイヤのない車、地上すれすれを浮いて走行するエアカーに待機していた仲間へ、手を上げて合図を送る。

なにかと大がかりな作業を行う環境保護機関の公用車は、荷台にクレーンを搭載した大型車がほとんどだ。真朱が二日間ずっと寝台代わりにしていたエアカーも例に漏れない。前列に四人の大人が仲良く座れるほどの広さがある。

『慎重にね』

「了解。減給されちゃ、たまらないからな」

細かい砂を巻上げ、救命ポッドに横付けされたエアカーから、同環境保護官の屈強な男が降りてくる。その保護官に、真朱は作業を

始めるようにと促した。

『眠り姫のご到着を、首を長くして待っているわ』

「期待を裏切られなきゃいいがね」

クレーンから伸ばされるワイヤーで手早く固定されてゆく救命ポッドを見つめながら、真朱は肩をすくめた。

気分が優れないのは、濃厚な潮の匂いの中てられているせいだろう。

漠然とした不安を押しつけ、真朱は眩い光を放つビル群を見上げた。

体を包むこの違和感は、何だろうか。肌が乾く不快な感触にカチは身じろいだ。なにかが違うと、本能が騒ぎ立てている。

強すぎる光を感じ、カチは目を開いてみた。

音がない　水もない、ここは海ではない。直感的にカチはそう思って、では、どこにいるのだろうかと視線を巡らせた。

「ここは……？」

何かが喉から出て行った。違うのは周囲だけではない、自分の体にも起こっているようだ。カチは意識と行動の大きなズレに吐き気がこみ上げてきて、たまらずに口元を左手で　押さえた。

「何、これは？」

細く、すらりと伸びた長い棒状の腕。丸い手の平からは、細い指が五本突き出している。

何処をどう見ても、これはヒレではない。

なにが起こっているのか、まったくわからなかった。理解が追いついてこないのだ。

カチは仰向けに寝そべったまま、周囲の様子を探るべく、頭を左右に動かした。

視界を眩ませる光は天井から降り注ぎ、真っ白に塗られた壁に反射して、手狭な部屋を照らしていた。

体が沈むようなマットレスが敷かれたベッド。備え付けのサイドボードには、ガラス製の水差しが銀色のトレイの上に置かれている。しばらく、ベッドのうえで仰向けに寝そべったまま、混乱する思考を宥めようと深呼吸をした。

しかし、早鐘を打つ鼓動は治まりそうにない。

カチは諦め、起き上がろうと寝返りを打ち、手をマットレスに突いたところで驚いた。

体が重いのだ。

力を掛けた腕が、体重を支えきれずに震えているのを、カチは信じられない思いで見つめた。

「……………」

歯を食いしばり、柔らかいマットレスから体を引き剥がすようにゆっくりと上体を持ちあげた。

「ここは、どこ……………でしようか？」

夢を見ているようだった。

真つ新のシーツの上に投げ出した素足と、五本の指を持った両手を、カチは呆然と見つめた。

とくとくと、身体の芯から流れ出る血液の微動は全身を巡っている。見慣れぬ両手。両足も、しかり、だ。

カチは力を込めればすぐに折れてしまいそうな、珊瑚のように細い指を、そつと動かした。握りしめ、開き。開いては、握りしめる。間違いなく、自分の手だ。

しかし、急激な変化を受け入れることは容易ではない。違和感を抱えたまま、カチは水色の薄い生地から覗く両足を床に下ろし、起き上がるときと同様に、体重を二本の足にゆっくりと掛けていく。ベットに手を乗せたまま、カチは恐る恐る立ち上がった。

「冷たい」

素足から伝わってくる冷んやりとした床の温度に身震いをし、出口も入口もなければ、継ぎ目すら見あたらない壁をぐるりと見回す。部屋というよりはむしろ、箱といえる閉鎖的な空間は、目に見えない圧迫感でもって、カチを脅かしている。

床へ引きずり込まれそうな重力にふらつく足にぞつとしながら、カチは光を反射する壁に映り込むものに気づいて視線を向けた。

踝まで達した長い銀色の髪。睫毛で縁取られた黒い瞳を持つ、大きな目。

今にも波に浚われてしまいそうな、頼りない体の線を隠す水色のワンピースを着ている少女が、不安げに眉をひそめて立っていた。

「これは……………」



カチは少女に向かって手を伸ばした。  
そうすれば、少女も同じように手を伸ばす。だが、光沢のある壁から腕が出てくることはない。

「これが、わたし？」

平面的な自分の姿に、カチは愕然とした。

ふらつく足取りで壁まで歩いて行き、滑らかな壁に鼻先を押しつけて、まじまじと覗き込む。

いくら凝視しようと、角度を変えようと。そこに映り込んでいるのは、シロイルカではない。呆けた顔が、じっと見つめ返してくるばかりだった。

「……うそ」

絞り出した声は、震えていた。

胸中は、不安と焦りで埋め尽くされ、群れから一人はぐれたような焦燥感に襲われた。

二本足で直立に立ち、口から息と『声』を吐き出す生き物などカチは知らない。

しかし、と。頭を振って考える。

本当に知らないのか？ そう自身に問いかけて、カチは海の底で聞いた“声”を思い出した。

知らないはずの音なのに、知っているような音……声。いや、言葉か。焦りに追い立てられ、喉が痛みを訴えるほどに渴くのを感じた。

「ちがう、きつと違う。夢じゃない……はず」

美しい仲間たちの歌声を、今もはっきりと思い出すことができる。うねる海の感触も、心の中にしっかりと刻まれていた。

確かにカチは、あの時までシロイルカだった。

「でも……」

目の前にある姿は、確かに自分のものだ。どんなに信じられなくても、事実を前にしては納得せざるをえない。

だからこそ、混乱は深まるのだろう。

海を回遊していたシロイルカだった自分も、こうして今、二本足で重力に捕われている自分も、確かな実感を持って存在しているのは確かだ。どちらが夢であると言い切ることは不可能だろう。

壁に両手をついて頂垂れていたカチは、響いてくる声に顔を上げた。

「予定よりも早く薬の効力が切れたわね」

「存在自体が特殊なんだ、何があつたつておかしくはないさ」

真っ白の壁の向こうから、男と女、二人分の声が聞こえてきた。

誰かが来たのか。訳もわからない状況から解放されることへの期待が膨れあがる。

しかし。それ以上に、なにが起こるのか、まったく予想のつかない恐怖に、カチは震えた。

心臓は薄い胸を突き破るように強く穿ち、歯の根が震えて虚しい音を響かせる。

「なに？」

滑らかな壁に張り付くようにして、カチは身を丸めて怯えた。

そんなカチを更に脅かすように、塵一つ付着していない白壁の一角に直線のラインが走った。定規で引かれたような、一分のズレも許さない直線は、大きな長方形を白一色の壁に描きだす。

そのまま、壁に描かれた長方形部分が迫り上がり、ぷしゅっと潮を吹くような音を立てて、横にスライドした。継ぎ目のない、一個の箱だった部屋に別の空気が流れ込んでくる。

少し甘い匂い。

香水の匂いだろうかと思つて、カチは戸惑った。

「香水？」

声に出してみても、何を示す概念なのか、頭の中で繋がらない。スツキリとしないもどかしさが、胸につかえた。

「あら、ごめんなさい。つけすぎた自覚はないのだけれど、気になるのなら先に誤っておくわね」

甘い匂いを纏わせた女が、苦笑を浮かべてそう言った。

「まずは、自己紹介から始めましょう。わたしは、ノート・リン・ドウルーツォ・アルビレグム」

部屋に入ってきた二人の内、女のほう　ノートが、一步前に出てきて名乗った。

隣に立つ青年と揃いの、光沢のあるジャケットにタイトな黒いスカートを穿き、ヒールの高い靴のせいで、余計に高く見える背丈に、カチは気圧された。部屋の隅へ、反射的に後ずさる。

カチはいかにも友好的だと示すように微笑むノートを、上目遣いで見上げた。

目の前に立ちはだかる女は、とにかく異質だった。

自分の境遇もいまいち理解が追いついてこないのだが、それ以上にノートの容姿にカチは困惑していた。

高い位置から見下ろしてくる目は、全体的に充血したように赤い。瞳は琥珀色に近い、濁った金色をしていた。

カチは、こんな目をした人間を“知らない”と思った。全ての出来事があやふやな中で、そう断言した自分自身にも困惑していたのだが。

「あなたの身の回りの管理を任された者よ。どうぞ、よろしくね！」  
動揺しているカチの様子に気づくことなく、ノートは肩の位置で整えられた群青色の髪を揺らして、勢いよく右手を差し伸べる。

「あ……あの」  
差し出される、同じ色の肌をした手に対して、どうしたらいいのかわからなかった。

カチは、ドアの側に立ったままこちらの様子を窺っている、ノートと揃いのジャケットを着ている青年へと視線を向けた。

「まったく」

よほど困った顔をしていたのだろうか。今まで黙っていた青年は、少しくセのついた短い黒髪を書き上げ、溜息まじりに言った。

「空気を読め、ノート」

「なによ、ちゃんと名前を名乗ってから話を始めているじゃないの。」

なにか悪かったかしら？」

くびれた腰に手を添え、ノートは唇を突き出して振り返った。天井から降り注ぐ人工灯よりも鋭い眼光が逸れ、カチは、ほっと息をついた。

「勢いのまま話を続けるな。あと、声がでかい。鼓膜が破れる」

「なによ、その言いぐさは！」

睨みあう二人の間に、なんともいえない緊張した雰囲気生まれる。

「自覚が足りなさすぎるんだよ。何度言えば自重できる？」

蚊帳の外にいるカチが萎縮してしまうほど剣呑とした睨み合いは、真朱が先に視線を外したことですぐに収拾がついた。

ノートは不満げに鼻をならずも、すぐにカチに向き直ってにこやかな表情を作って続けた。

「自己紹介が終わってなかったわね。この小生意気な男は、真朱。

あなたを思念の海から引き上げた環境保護官であり、外洋活動潜行艇部隊員の一人よ」

「は……はい」

「ああ、もう！ 素晴らしいわよ、あなた！」

「え？ あ、あの……わたし」

胸の前で両手を組んで、叫び声に近い歓喜の声を発するノートに、カチはただ身を竦ませるより他にできることは何一つなかった。

「救命ポッドで打ちあげられたうえに、安定した意識を持つ個体は運命の三姉妹ノルメル以来の事象なの！ 私、もう嬉しくて！ 生還したアンピリトテ自体少なく……」

「ノート」

放っておけば、そのまま踊り出してしまいそうな勢いではしゃぐノートを諫めるように、真朱の咳払いが入る。

「ともかく、私たち環境保護機関は、あなたの存在を受け入れ、守り通すことを誓うわ。だから、信頼を預けて欲しいの。悪いようにはしないわ」

「しん……らい？」

一歩、一歩と近づいてくるノートを牽制するように見つめ、カチはどうするべきなのか迷っていた。見ず知らずの人間にいきなり信頼しろと言われたところで、自分の存在すらあやふやなカチには、判断を下す余裕はまったくない。

黙って、おとなしくしているカチの様子を肯定と受け取ったのか、ノートは両手を広げて、ためらうことなく歩み寄ってくる。

「さあ、覚えているのなら、聞かせて頂戴。あなたの名前を！」

「っ？」

カチは、びくりと肩を震わせた。

狭い部屋にがんがん反響するノートの大きな声に驚いたわけではない。もっと別の場所から強い感情が流れ込んでくるのを感じ、舌が痺れるような渴きと、腹の底が裏返のような恐怖を感じたのだ。

「どうしたのかしら？」

「どうしたもなにも、怯えているのがわからないのかよ。だから、あんたは」

真朱の声を押しつけるように、電子音が響いた。

カチが驚いて音のほうに視線を向けると、壁の一部が先ほどのドアと同じようにスライドし、受話器が迫り出す。

「ラボから？」

気怠げな調子から一転して緊張をはらませた声になった真朱は、液晶ディスプレイに映し出された文字を見て、表情までも強張らせた。

どうしたのかと聞くまでもなく、部屋には不穏な空気が漂い始めていた。

（なんだろう）

妙に苦しくなる息に、カチは胸元に手を当てた。

「あなた、大丈夫？」

掛けられるノートの声に、カチは何一つ応えることができなかった。脈は速くなり、血管が切れてしまいそうに全身が痛い。

自分の身になにが起こっているのか、見当もつかない。いや、そもそも、この痛みは自分の痛みなのだろうかとさえ、疑った。

「ノート、ラボで保管していた擬体が……」  
頭痛を感じ、カチは目を閉じた。

眩い光から閉ざされた視界。漆黒であるはずの視野に、浮かび上がってくるぼんやりとした白い影。カチは思わず、小さな悲鳴を上げた。

(これ……これは……)

耳鳴りのような高い音が脳を刺激する。

大きく広がってゆく漆黒のスクリーンに現れたのは、青白い肌を持った海に住まう生き物。

シロイルカの、ぐったりとした姿だった。

「い、いやっ！」

カチは頭の中で鳴り響く高音を捕まえようとでもいうように頭を抱え、叫んだ。

『いや　っ！』

空気が　いや、空間が大きく揺らぎ、波が生み出される……。

「なにっ！」

アブソリュート・ロケーション

絶対反響定位能力？　くそ、だからって強すぎるだろうっ！」

目視できない音波の波が、ベッドからシーツとマットレスを剥ぎ取った。

呆然と立ちすくむノートを床へと叩きつけ、愕然とする真朱を壁へとめり込ませる。

「なに……これ？」

訳がわからず、カチは己の両手を見つめた。

体の内から大きなものが外へと流れ出していったのは、感覚的に捉えていた。とはいえ、どうしてこんな事態を引き起こしているのか、核心に迫れるようなことは何一つわからない。

床に突っ伏すノートは、倒れたときに打ち付けたのか、額から血を流している。意識はないようだが、気を失っているだけだろう。

真朱は、あれだけ強く壁に叩き付けられていながらも意識は保っている。しかし、すぐに動くことはできないようだ。床に膝をついて、苦しげに呻いていた。

「わたしが、こんなこと？」

怖かった。震える両手を握りしめ、カチはそのまま口元へと押しつけた。

「こんな……つつ！」

たまらずに目を閉じたカチは、耳鳴りと共に浮かび上がる、シロイルカの姿に閉じた目をすぐに見開いた。

ただの幻ではない。どうしてそう思うのか聞かれても、はっきりと答えることはできなさそうだ。しかし、カチは確かにそう感じていた。

散々な有り様の部屋をぐるりと見回し、素足が一步、前へと出る。

「さて、何処へ行く気だ！」

「う、ごめんなさい……わたし！」

動けないでいる真朱の横をすり抜け、カチはもつれる足で部屋から飛び出した。

「行かなくちゃ。どうしてもか全然わからないけど、行かなくちゃ！」  
純白の人工灯が照らし出す通路を、カチはおぼつかない足取りでありながらも駆けけた。

素足のまま、堅い床を蹴って走るのはつらい。だが、今はそんなことを気にしていられるほどの余裕はなかった。

体にまとわりつく重さを振り払うように、激しく腕を動かし、幾度も転びそうになりながら、カチは切れ切れの息で諦めることなく走り続ける。

「道が！」

一直線に伸びる通路の先が、二つに別れているのに気づく。どちらに行けばいいのか迷うカチを誘うように、耳鳴りが響いた。

「こつち、なの？」

左側の道へと視線を向け、戸惑いながらも、耳鳴りを感じる方角

を選択して進む。



( 水の匂いがする )

何処も同じ作りの通路を走り、カチは鼻孔をくすぐる懐かしい匂いを感じた。気が動転していたことで忘れていた渴きを思い出し、喉が鳴る。

あまり広くない通路を進み、カチは青い扉の前で立ち止まった。強い、水の匂いは、ここから流れ出ているようだ。

「ここに、いるの？」

カチには、どうやって先へ進めばいいのかわからない。

とりあえずカチは、青い扉を右手で触れてみた。足の裏から感じているものと同じ、堅く冷たく、滑らかな感触。

岩や海底とは相反する無機質さは、気持ちが悪い。

青い扉を睨んでいたカチは、唐突に響く電子音に、驚いて飛び上がった。

呆然と見開いた目の前で、扉が左右に割れた。奥から、白衣を着た二人組の男が現れる。

「保護管理局のアンピトリテが逃げ出したってねえ。何をやっているんだか」

「久方ぶりの、使える貴重なサンプルなんだ。もっとしっかり管理してもらわなければ困るな。擬体のほうが駄目になったぶん、なおさら……」

ノートと同じ、赤い目に金色の瞳を持った二人の男とカチの視線が重なった。

「あ、アンピトリテ？ どうして、ここに！」

しばらく呆然と見つめ合う。先に沈黙を破ったのは二人の内、背が低く太っている男のほうだった。

「ばか、なにをやってる！ 捕まえるんだよ！」

カチは、響く怒声に我を取り戻した。怯え竦む体を無理矢理どう

にか動かして、後ずさる。しかし、数歩と歩く間もなく壁に背があたり、すぐに追い詰められてしまった。

裾の長い白衣を着ているせいなのだろう。妙に細く見える長身の男が、覆い被さるようにカチへと近づいて来るのを、震えながら見ていることしかできない。

「いつ、嫌。来ないでください！」

「おやおや、君は言葉を喋れるんだねえ。どおりでノート・リン施設長が異様に、はしゃいでいたわけだ」

太った男は陶醉するような口調で言った。両手でバインダーを抱きしめ、分厚い眼鏡の向こうにある小さな目を細めている。

「こりゃあ、真朱の野郎に欺されたな。素直に擬体を研究調査局に回してきたのは、特異なアンピリトテを困ったためだったのかね」

「ありえるねえ。しかし、まったくもって腹立たしいことだよな。」

特例で処分を免れているだけの存在なのに、大きな顔をしてさあ「太った男はつぶらな瞳で、ねっとりと言め回すように、怯える力子の頭から爪先までを観察し始める。

生理的な嫌悪感を覚え、剥き出しの白い肌に鳥肌が立った。

「ねえねえ。ちょうどいいから、僕達のラボに連れて行こうよ」

「越権行為だぞ」

「バレなきゃ良いんだよ。施設は広いから、どうにだってなるさ」

「見た目によらず、大胆だな。バレたら、クビどころの話じゃないぞ」

含み笑いを隠そうともせず、太った男は分厚い唇を吊り上げた。

「だから、バレなきゃいいんだよ」

「まったく」

長身の男は決してはみせるものの、だからといって止める気はないようだった。いや、むしろ向けられる琥珀の目は、肯定を示しているように思える。

カチは身に迫る危機に震え、どうにかして逃れる術はないかと視線を泳がせた。

(あれ……は……?)

照明が絞られた薄暗い室内に、なにか、ぼんやりと光るものが置かれていたことに気づいた。

見てはいけない。

防衛本能が警鐘を鳴らす。だが、気づいてしまったものは、どうにもできない。カチは唇を噛みしめ、長身の男の陰から覗くようにして、部屋を見た。

「！」

引きつった悲鳴が喉から迫り上がる。強張った体は更に引きつり、膝が震えた。

銀色の台に乗せられた、ガラスケースに押し込められている、とても大きな物体。もはや原型を止めてはいないが、カチは「それが何であるのか、分かった。

……分かってしまったのだ。

「あれ……あれは……」

恐ろしかった。ただ、ひたすらカチは恐怖し、震えた。

「あれ？ ああ、まだなにも聞いてないのか。あれは君の」

「何をやってる、お前ら！」

割り込んでくる怒声に、太った男のたるんだ頬の皮が波打って震えた。

「真朱！」

良く磨かれた床にブーツの踵を勢いよく叩きつけ、怒気を露わに駆けてきたのは真朱だった。

長身の男の注意が逸れた隙を突き、カチはワンピースの裾を翻して、通路の更に奥へと向かって逃げた。

(嫌だ……嫌だ！ もう、嫌！)

目尻に痛みを感じ、カチは泣いていることを自覚する。

(帰りたい、海に。群れのところに帰りたい！)

ガラスケースに放置された、かつてシロイルカだった青白い存在。胸をざわつかせる恐怖が、カチを走らせる。

「待て！ 興奮しているのはわかる。だが、落ち着け！」  
振り向けば、啞然としている白衣の男たちを押し分け、真朱が追いかけてきていた。

生まれて初めて歩いたと言っても過言ではない、おぼつかない足取りのカチには、どう甘く見ても勝算はないだろう。

「我々は……いや、少なくとも俺は、お前に危害を加えることはない。絶対にだ！」

「来ないで、来ないでくださいっ！」

揺らいだ空間が生み出す、目に見えない強大な波が、カチの叫びと共に真朱へと襲いかかった。均整の取れた力強い細身の体を、軽々と吹き飛ばす。

「私は、海に帰るんです！」

真朱は頭から床に叩きつけられ、悲鳴もなくころがってゆく。

そんな真朱を気にする余裕も一切なく、カチは必死になって駆ける。

何処に行けば良いのか、あてなどまったくくない。しかし、走らずにはいられなかった。

「帰して、私を……海に！」

瞳から流れ出した涙が口に入った。郷愁を抉り出すような塩辛さにカチは咽びながら、眼前に迫る壁に愕然とした。

「進めない!!」

息を切らし、足を止める。どっと押し寄せてくる疲労感に喘ぎながら、カチは壁へと手を伸ばした。

『こつちへくるといい、カチ。始めよう』

「誰？」

脳裏に響いてくる声に、カチの肩が震える。

チン。

妙に拍子抜けする、軽薄なベル音が鳴った。

それと同時に、目の前に立ちはだかっていた壁が左右に割れ、小さな空間がカチの前に現れる。

「待てと言っているだろうが！」

追ってくる真朱の怒声にカチは追い立てられ、エレベーターのゴンドラへと飛び込んだ。

扉が締めまり、ゴンドラが動き出す。

不意に襲いかかってくる奇妙な浮遊感にバランスを崩したカチは、床に座り込んでしまった。そのまま動くこともできず、扉の上の光るパネルを見上げる。

「どこに……向かっているの？」

床に押し潰されそうな圧迫感に両手をついて耐えながら、密閉されたゴンドラの内部を浮ついた目で見回すも、不安を解消できるようなものは、何一つない。閉じこめられていた部屋と同じような壁があるばかりだ。

がくとゴンドラが揺れ、小さなベル音が鳴った。

反射的に顔を持ち上げれば、カチの動きに合わせたように、さつと扉が開いた。

停止したままのゴンドラの中でゆっくりと立ち上がり、カチはちりちりと痛む腫れぼったい目尻を擦る。

「ここは……海？」

鼻腔をくすぐる潮の匂い。カチはエレベーターを降りた。潮の香りが強くなる。

辿り着いた階は、部屋というよりは、通路と言ったが良いのかもしれない。

中央が吹き抜けになっていて、四方から下を眺められるようになっている。カチは鼻腔をくすぐる匂いに惹かれるまま、落下防止の手すりに向かって歩いていった。

天井から降りそそぐ人工灯とは別に、迫り上がってくるような光を感じる。手すりを握りしめたカチは、身を乗り出して下を覗き込んだ。

「海じゃない」

天井からの照明をキラキラと反射している水面は、残念ながら海ではなかった。吹き抜けの遙か下にあったのは、海水を湛えた巨大なプールだった。

プールと言っても、驚くほどの広さがある。今の大きさのカチなら、海と言っても支障がないほどに広く、深そうだ。

一瞬、カチは追われているのを忘れた。ずいぶんと長い間、目にしていないように思える、深い青色に見入っていたのだ。

とめどもない懐かしさに引き込まれ、カチは無意識にさらに身を乗り出した。近くなる水の匂いに、いよいよ心が逸る。

「馬鹿！ 落ちるぞ！」

「え？ あっ！」

不意に響いてきた怒声に驚くよりも先に、カチは襲いかかってきた浮遊感に息を呑んだ。

落ちている。

細い腕は体重を支えきれず、カチは手すりから滑るようにして宙へと投げだされていたのだ。

「くそっ！」

見上げる光の中に影が差した。

手すりを乗り越え、宙に躍り出して落下してゆくカチに向かって手を差し伸べたのは、真朱だった。

「手を伸ばせ！」

「……でも！」

吹き上げてくる風に転がされながら、カチは必死になって手を持

ち上げる。

「もつとだ！ 死にたくはないだろう！」

叱咤の聲に上半身をよじり、真朱へと向かって更に手を伸ばす。互いの指先が何度か触れあつたのち、骨張つた真朱の手がカチの手をしっかりと掴み取つた。

「大人しくしてろ、絶対に喋るなよ！ 舌を嚙んだつて、俺は知らないからな！」

力づくで引き寄せられた。抱え込まれた頭は、真朱の胸に押しつけられる。

強い鼓動と暖かい体温に包まれ、身の竦む恐怖からはいくらか解放された。だが、息をつくのはまだ早い。

盛大に響く水音に、カチはくぐもつた悲鳴を上げた。

着水の衝撃に、真つ白に濁つた水が吹き上がり、視界は一瞬にして、青に埋め尽くされていった。

（冷たい！）

海水の中に埋もれていきながら、カチは震えていた。

優しいとばかりに思っていた水は、地上よりも更に重く体を束縛し、恐怖心をカチに植え付ける。

がっちりと真朱に抱きすくめられたまま、カチは痙攣を起こす子供のよう手足をばたつかせて暴れた。だが、弱い力では波を立たせることすらもできない。

（ 苦しい！ ）

息も。自由にならない体も、ただ苦しかった。力が抜け、緩んだ唇の端から、酸素が泡となって流れ出す。

最後に振り絞つた力で口を押さえ、なんとか息を繋ぐ。だが、現界は近い。

息苦しさと恐怖に薄れゆく意識に、顎が上向いた。

カチはぼんやりと霞んでいく視界の中で、水面に揺れる純白の人工灯の光を見た。

いや、確かに視線は上を向いてはいるが、見ているのはまったく

別の光だった。

視界と共に薄れゆく思考。煩わしい耳鳴りが鼓膜を引っ掻く。脳裏に浮かび上がるのは、星の瞬く夜空だった。

突如として現れた隕石により破壊された、宇宙ステーションの残骸と人々の亡骸が、一緒になって流星のように燃えている。

地上から四百キロメートルも離れた地球周回軌道上から落下するパネル片は、全てが燃え尽きることはない。薄いオゾン層を分け入って、地上へと雪のように火の粉を舞い上がらせながら降りそそいでいた。

（これは……なに？）

まるきり、夢を見ているような感覚だった。

（世界が壊れていく）

破壊され、紙くずのように散らばり、焼けてゆくステーション。

無数の人命。

更に、それら諸々を撥ね除けて隕石は日本海近郊に落下し、世界は崩壊を始める。カチの意識も、そこで暗転した。

（これは記憶。わたしの……記憶）

シロイルカとしてではない、人としての記憶の中に溺れ、カチは深い闇の中へと沈んでいった。



二度目の目覚めも、あまりいいものではなかった。いや、むしろ酷くなっているようにさえ思った。

カチは弛緩した体で、もそもそと身じろぎをし、大きく息を吸った。海の中ではない。息ができる喜びに、ぼんやりとした意識が徐々に冴えてくる。

「ここは……？」

寝かされていたのは、ベッドの上だった。

一瞬、今までの出来事が全て夢であったのだろうかと考え、カチは首を振って否定した。

当たり前のように体を包んでいた水に飲まれる恐怖は今もなお、乾いた空気の中にあっても体の芯に残っている。この感覚は夢であるわけがない。

着替えさせられたのか、乾いたのかは定かではないが、水色のワンピースを着けたまま、薄手のシャツが掛けられていた。

（走ったせい、なのかな）

全身は異様にだるい。起き上がるどころか、指一本を動かすのすら、ままならない。

最初に目が覚めた個室とは違い、寝かされている部屋は密閉されていないように見えた。狭いものの、僅かに流れる風が頬をくすぐるのを感じる。

カチはそのまま、ぼんやりと天井を見上げていた。

（あんな酷いこと……どうして）

混乱がいくらか落ち着くと、入れ替わるようにして迫り上がってくる激しい感情に、カチは目尻から熱い涙が流れてゆくのを感じた。

溺れたシヨックも大きい。だが、それ以上にカチは、無惨に刻まれたシロイルカの姿に嘆いた。

生き物であったとは思えないほどに生気を喪失し、乾いた肉の塊

となった姿がくつきりと脳裏に深く刻まれている。目を閉じれば、瞬時に恐怖と共に浮かび上がってくるほどに。

「目が覚めたのか」

幼い声に呼びかけられ、カチは瞼を瞬いた。

柔らかいベッドの上に仰向けで寝ころんだまま、顔だけを動かす。いつから枕元にいたのか、銀色の長い髪を二つに結ってまとめた少女が立っていた。

「誰……でしようか？」

「オルカ・オフシヨア。カチ、あなたと同じ存在」

「同じ、存在？」

聞き返し、カチはゆっくりと起き上がる。

「そう。オルカ・オフシヨアはアンピトリテ。カチも、そう」

じつと見つめてくる、緑と青のオッドアイ。

長い睫毛に縁取られた丸く大きな瞳だが、意思といったものが感じられない。映り込むものを、ただそのまま映し出す、鏡のような眼球だ。

愛らしい容姿によく似合う、フリルのついた黒いワンピースを着ているオフシヨアは、殺風景な部屋に飾られた置物のようにも思えた。

「アンピトリテって、なんですか？ それに、わたしの名前を、どうして知っているのですか？」

「それが、オフシヨアの力」

無感情な声で短く言って、オフシヨアはベッドの上に座り込んだカチを見上げた。

「問うことは間違いではない。だが、オフシヨアがカチに告げられることは限られている。答えを欲するのならば、ノートか真朱に問うべきだろう」

オフシヨアは、艶やかな銀系の髪を揺らし、頷いた。

「目が覚めたのなら、行かなければ」

「行かつて、何処へですか？」

オフショアは小さな手で扉を指さした。

「カチを待っている。しかし、その前に、これを着るといい」

妙な口調で語るオフショアは、サイドボードに置かれている布束に目配せをした。

「これは？」

「ここは、海ではない。地上は寒く、カチでは凍える」

促されるまま取り上げ、広げてみた。真朱たちが着ていた服と同じデザインのワンピースと、厚手の黒いストッキングだった。

ふと床を見れば、ブーツも用意されている。

「あ、ありがとうございます。オフショア……さん」

手触りの良い厚手の布地は、しっかりとっていて暖かそうだ。すくなくとも、心許ないワンピースよりはマシだろう。

カチは周囲を見回し、オフショア以外に誰もいないことを確かめた。

水色のワンピースを脱ぎ、手早く着替える。ストッキングを穿いて、ブーツに足を通して立ち上がる。

「暖かいですね。それに、動きやすそうです」

「こつちへ、カチ」

手を握れという意思表示だろう。差し伸べられる小さな手に、カチは戸惑いながらも従った。

暖かい人肌をそつと握ると、オフショアに半ば引つ張られるようにして歩きだす。

小さな見た目とは相反する意外な力強さに、カチは面食らった。

触れてもいないのに開くドアに驚きながら、共に個室を出た先は、広い部屋になっていた。

応接間か、執務室なのか、周囲の壁にはいくつもの書棚が置かれ、大きな窓の側には机と椅子が並べられている。部屋の雰囲気を決める壁紙はベージュで、とても落ち着いた霧囲気を醸し出していた。

「まあ！ よく似合っているわね」

「えっ！」

大きな声に、カチは反射的に飛び上がった。

部屋の中央にローテーブルとソファが置かれていた。

革張りの、柔らかそうなソファから立ち上がったノートの熱い視線に、カチは一步、二歩と後ずさった。

「ノート。カチが驚いている」

「あら、ごめんなさい。声、そんなに大きかったかしら？」

微笑を浮かべるノートに、敵意がないのは何となくわかる。

だが、無惨に刻まれたシロイルカの姿が脳裏に焼き付いて離れない。

カチはあの、白衣の男たちを連想させる特異な色合いの瞳を持つノートに怯えを感じていた。

「……カチ」

ぎゅっと手を握りしめられ、カチは反射的にオフィスに視線を落とした。

感情が読み取れないオッドアイは、ただぼんやりと宙を見ているようにしか思えない。

「ノート、カチは偽りの姿の末路を見た。だから、アルビレグムに対して恐怖心を抱いている」

ノートの顔から微笑が消え、苦々しい表情に変わる。

「……そうよね。あんなものを見たら、怖がるのもむりはないでしょう。配慮が足りなかったわ」

「見られちまったのは、俺達の落ち度だな」

プシッ、という空気音と共に開く扉の向こうから、頭に包帯を巻いた真朱が現れる。

「いいか、おとなしくしているよ。動くんじゃない」

真朱は吐き捨てる、状況を理解できずに身を固くするカチへと突進するような勢いで歩み寄り

「え？ あ、あの、わたし！ きゃっ！」

目の前で振り上げられた腕に、カチは反射的に目を閉じ、悲鳴を上げた。

次いで、頭と耳に違和感を覚え、眉をしかめる。

とりわけ痛いというわけではない。これは異物感だろうか。両耳に丸い何かが覆い被さっているようだ。

「携帯型の小径思念遮蔽装置だ」

「け、けいたい……しょけい？」

言い間違えるカチに、なんとも言えない溜息が掛けられた。

「……通称、サイレンス」

耳が覆われているせいか、聞こえる音がぐもっていた。

慣れない感覚は不快で、カチは外そうと耳に手を伸ばした。

だが、睨みつける真朱の目が怖くて、サイレンスと言われた機械を両手で掴んだまま何もできずに立ちすくんだ。

「本来なら、アルビレグムのテレパシー能力を抑制する装置だが、精神波を遮断する性質上、お前の能力もいくらか抑制できる。しのごの言わずに、着けておけ。でないと……」

勢いのままに捲し立てる真朱は言葉を切って、圧倒されているカチに真っ白い包帯を指さしてみせた。

「死人が出かねない。俺でなけりゃあ、危なかったぞ」

「そんなこと言われても。わたし……何も、何もわからないのに」  
目頭が熱くなるのを感じる。

混乱は増してゆくばかりで、カチは不安に押し潰されてしまいうだった。

「これだけは聞いて欲しいの、カチ」

静かに、優しく響く声に、カチは俯きかけた視線を持ち上げた。

「私たち環境保護機関は、あなたのような存在……アンピトリテを守るために設立された組織だと言ったわね」

緊張に唇を噛みしめ、カチは小さく頷いた。確かに、ノートも真朱もそんな言葉を口にはしていた。

ただ、カチには今ひとつ、ピンと来なかった。

自分がどんな存在であるのか、未だにはっきりとしないのに、守られる理由など全然わかるわけがない。

「それは本当よ。言葉でしか伝えることはできないけれど、信じて欲しいの。あなたがこの世界で生きるために」

「でも、なぜですか？ なぜあんな酷いことをしたんですか！」  
いきなり信じると言われても、それは無理な話だった。

カチは警戒していることをアピールするために、ノートを睨んだ。  
「研究調査局の行為については、私たちの本意ではないわ。まさか、保護不可侵条例を平気で破るなんて思わなかったの。でも、そうね」  
ノートは哀しげに眉をひそめた。

「そうであったとしても、私は謝らなければならない立場にあることに、違いはないわ」

一呼吸を置いて、ノートは口を開く。

「ごめんなさい、カチ。あなたを守るためとはいえ、擬体を研究調査局に渡したのは私、ノート・リン・ドウル・ツォ・アルビレグムです。予期していなかったこととはいえ、言葉では償いきれない結果を招いたことを謝罪するわ」

迷うことなく、ノートは深々と頭を垂れた。

潔すぎるノートの態度に、カチは黙り込むしかなかった。

顔を上げ、しっかりと見つめる凜とした視線には、嘘はない。心からの謝罪であることをカチは感じた。

「わたしは……」

膝丈のワンピースをぎゅっと握りしめ、カチは訊いた。

「わたしは、そもそも何なんですか？ 人間なんですか？ それとも、シロイルカなんですか？」

プールに落ちたときに見た、大地が壊れる生々しい記憶と、シロイルカとして海を泳ぎ回っていた記憶が、頭の中に混在している。

何がどうなっているのか、何が本当なのか、はつきりさせたかっ  
た。

「お前は、人間だ」

胸中の不安感に煽られるままに叫んだカチに答えたのは、真朱だった。

「八十年前にシエルターで海へと避難し、生き残った人間だ」

真朱の言葉に、カチの脳裏には崩壊してゆく宇宙ステーションの映像がよぎる。胃が迫り上がるような恐怖に襲われ、反射的に喉元を押さえた。

「夢じゃ、夢じゃなかった？」

こめかみを、汗が一筋つーつと流れ落ちる。

「見て頂戴。これが、今の地球よ」

室内の照明が落とされた。

微かな機械音と共に天井から降りてきた白い布に、同じようにして現れたプロジェクタの光が浴びせられる。

「これが、地球……なんですか？」

白いスクリーンに映し出されたのは、漆黒の空間に浮かぶ真っ青の球体だった。

隕石によつて破壊されたはずの宇宙ステーションの輪と、雲がかかっているものの、それ以外には何も無い。

大陸は、ただの一つも存在してはいなかった。

「まるで海王星ネプチューンのように深い青。地球テラは青に満たされている」

瞬くプロジェクタの光に照らされる、オフシオアの無感情な顔をちらりと見やり、カチは呆然とスクリーン上の地球を見つめた。

何度どう見ても、どれほど凝視しても、青ばかりが広がる球体が地球であると、カチは信じることができない。

「今の地球に大陸はない。この街だつて、幾つもの浮体ブロックを組み合わせて造られた浮き島の上に建っているんだ」

「宇宙ステーションも、あなたが知っているものとは少し違うでしょう？ 私たちアルビレグムと月面地球人によつて新しく造られたものよ」

プロジェクターのスイッチが切られ、照明が点けられる。

眩しい視界に目を細め、カチは機械を操作していたノートに顔を向けた。

「アルビレグムって？」

「太陽系とは異なる星海から亡命してきた、知的生命体。母星である地球を失った月面地球人と共に生きる異邦人よ」

カチは自分の中に散在する記憶の欠片を掻き集めようと試みた。だが、動揺が大きすぎて、集中できない。首を振って、諦める。

「宇宙人……ってことなんですか？」

「そうね。可愛らしい言葉で言えば、そうなるでしょう。見た目はそう変わらないけれどね」

特徴的な目を細めてノートは答えた。表情のある眼球は、偽物ではない。

「カチはアンピトリテ」

「オフシヨア、お前もな」

「そう、オフシヨアも同じアンピトリテ。深い海の底で、特異な進化を遂げたホモ・サピエンス」

カチは長い髪を一房そつと手に取って、まじまじと見つめた。

みずみずしく艶やかで、弾力のある髪は銀色だ。白髪ではない。人工灯の光を反射して、キラキラと輝いている。

「でも、わたしは」

「あのシロイルカは、お前じゃない」

戸惑うカチの声を押しつけて、真朱はトーンを低く落とした声になって言った。

苦みを感じさせる響きに、カチは体を硬くする。

「ヒトのものに酷似した脳をもつ、相違新生命体……俺達は擬体と呼んでいる」

「そうい……しんせいめいたい？」

眉をひそめ、カチは真朱の言葉に首を傾げる。

「あのシロイルカは、お前の脳を模した脳を持っていた。つまり、お前の複製だ」

「わたしの？」

いよいよ訳がわからない。カチは大きな執務機のそばに立つノートを見やった。



「改変された世界は、いまだにわからないことがたくさんあるの。あなたたち、アンピトリテについても、そう。ごめんなさいね、全てを答えることはできないの」

ノートは執務机に埋め込まれたパネルを操作した。

窓から射し込む光を遮っていたスクリーンが、天井へと飲まれていった。カチは暖かい日差しを感じて瞼を瞬かせた。

ガラス窓の向こうには真っ青の空が広がり、宇宙ステーションの輪を見ることができた。

「新たな地球を知るため、深い海の底に潜むものを知るためには、あなたのような存在……アンピトリテが持っている記憶が必要不可欠なの」

強い感情を宿す瞳に見つめられ、カチは戸惑った。

「だから、わたしを……守るのですか？」

「カチ。アンピトリテを必要としているのは、私たちだけじゃないの。もっとたくさん、それこそ、目的のためなら何でもやりかねない過激な連中もいる。保護管理局は、そんな連中から、完全保護不可侵生物を守るために存在しているのよ」

「でも、わたしは何もわかりません。何も、知りません」

「それは、違う」

被せるようにして割り込んでくる声に、カチはオフィスアを見やっただ。

「カチは思い出せないだけ。忘れてしまっているだけだ」

向けられる、オフィスアの視線にカチは背筋が栗立つのを感じた。

一見すると無感情に思えるが、左右不对の色を持つ瞳は、心の奥深くにあるものを抉り出すような強さを感じた。理由のわからない恐怖に襲われ、カチは小さく震えた。

「混乱しているのよ、カチ。時間が経てば徐々に記憶が戻ってくるでしょう。なにせ八十年も眠っていたのだから、ね」

「いますぐに、どうのこうのという話じゃないさ」

真朱は不機嫌そうな表情をカチに向けた。

「世界は変わり、お前はアンピトリテと呼ばれる存在に変化した。だが、そんなことをいきなり言われたって、実感がわかないのは当然だ。ぐだぐだ話していたってしかたがない、そのうちわかるだろうよ」

「そ、そうなんですか？」

「そうさ」

カチは頭一つ分くらい高い背の真朱を見上げ、再び視線をノートに戻した。

「ノート、連星政府の認定は下りたのか？」

「認定？」

「完全保護不可侵生物の認定だ。役所ごとでしかないが、その認定がなければ、お前は正式な保護対象にはならないのさ。国境のない地球からサルベージされたものは、基本的に見つけた奴のものになる」

どういふことかと首を傾げれば、溜息がない交ぜになった、呻き声を浴びせられた。

悪いことでもしたのかと思い、身をすくめれば、真朱は何か言いたげに口を動かし……。

しかし、何も言わずに肩をすくめて頭を掻いた。

「何をしてもいいってことだよ」

苦々しい声に、カチは唇を噛んで俯いた。

「じゃあ、あのシロイルカは？」

「何から何まで自由にして良いというわけではないわ。認定とは別に、アンピトリテに対する必要以上の接触を禁止する、保護不可侵条例というものがあるの。だけど、研究目的であるとはいえ、条例を無視して、あんなことまでするとは思わなかったわ。同じアルビレグムとして、恥ずべきことよ」

ノートの表情が怒気に強張る。

「カチ、あなたは特異な存在であるアンピトリテの中でも更に特異な存在なの。だからこそ、危険であり、認定が下りる前に、あなた

が特別である事実を知られるわけにはいかなかった」

微笑笑を向ける、ノートの目尻が光っているのを見て、カチは己の混乱を散らすように息を吐き出した。

「だからといって、許される行為で無かったことは認めるわ。償いは、できうるかぎりするつもりよ。納得いかないとは思っけれど、今は我慢して頂戴」

ノートは執務机に着いて、プロジェクターを操作していたパネルへ手を伸ばし、青いボタンを押す。

何も置かれていなかった机の上に、半透明のスクリーンが浮かび上がってくる。

下から上へと、スクリーン上で流れてゆく紋様を目で追い、スクリーンの端に画かれている文字に、カチは声を上げた。

「環境保護機関、保護管理局！ わたし、読めます！ ……どうしてでしょう？」

「そりゃそうだろう、日本語だから」

「日本語？」

聞き返すが、真朱は取りあおうとはしない。スクリーンを見つめるノートを促した。

「……で、どうなんだ、ノート。認定は下りているのか？」

真朱の位置……つまり裏面からは文字は紋様に処理され、読めないようになっている。

「安心して頂戴、認定は下りているわ。ただし、アイディー・カードの発行は、連星政府日本国庁舎にて行うそうよ」

「取りに来いつてか。いつもどおり、郵送すりゃあ済むものを」

「カチを見たいのでしょう。ともかく、エスコートをお願いするわね、真朱」

スクリーンを消して椅子から立ち上がったノートはにつこりと微笑み、不満げに眉をひそめる真朱に言った。

「なんで俺が」

「リドフォール・レイ・スクーノート・アルビレグム連星議員のご指

名よ」

「……なんだと？」

唸るような声に、カチは真朱を見つめた。

すつと細められる目は、強張っているようだ。カチはそんな様子をおかしいと思った。

だが、単なる勘にしか過ぎない。なぜそう思っのかまではわからない。

「ここに、来ているのか？ あいつが」

「ついさつき地球に到着されたそうよ。あなたの顔も見たいんじゃないかしらね」

「気が乗らねえな」

がしがしと頭を掻いて背を向ける真朱に、ノートは容赦なく言った。

「あなたがどう思おうと、これは命令でもあるのよ。なんだって、正式な書面で来ているんだもの。必要なら、プリントアウトしてあげるけど？」

「くそ……」

毒づいて、真朱は大きく肩をすくめた。

「必要ない。さっさと行って、さっさと済ませてくるよ」

そのまま、振り返ることなくドアに向かって歩いて行ってしまっ真朱の背中を、カチは呆然と見送る。

「あ、あの。わたしは、どうすれば？」

「真朱にこの街を案内してもらいなさい。きっと、面白いわよ」

ノートはにこりと笑い、親指で背後の窓を指し示してみせた。

「空が近い」

ビル風に煽られる長い髪を両手で押さえ、カチは青く晴れ渡る空を見上げた。

緩やかに流れてゆく大きな雲はとても柔らかそうで、手で掴めば飴のように溶けてしまいそうだなとカチは思う。

「何も無いから、なおさらそう思うのかもしれないわね。現在の地球は、この浮島……ゼタフロート以外は、海と空しか存在しないものね」

「ゼタフロートっていいのですね」

バイクを取りに行った真朱に言われるまま、カチは環境保護機関の巨大なビルの入口にノートと並んで立っていた。オフィスは建物から出ることができないらしく、途中で別れた。

「人が、たくさんいますね」

「私たちにしてみれば、巨大な浮島でも、地球の面積から言えば、パーセントにも満たない小さな浮島だもの。人がひしめいて見えるのは当然よ」

日差しは中天にあり、大きな道路が一直線に伸びる道は、様々な大きさの車が行き来している。

カチは歩道を談笑しながら歩く、携帯型の小径思念遮蔽装置……すなわちサイレンスを着けているアルビレグムの男女を目で追った。隣に立つノートも、サイレンスを装着している。

「……来たようね」

響くエンジン音に、カチは驚いた。

小気味のよいリズムに誘われ、ふっと視線を動かすと、環境保護機関の地下からサイドカーが飛び出した。

銀色の車体に、青いラインの塗装。地面から数十センチの高さで浮いている大型のバイクが、カチとノートの前に乗り付けられた。

「まったく、面倒だな」

バイクにしがみつくとくようにして乗っていた真朱は、上体を持ち上げて嘆息した。

「ちゃんとヘルメットを被りなさいって言っているでしょう、真朱」  
「俺には必要ないさ」

着けていたゴーグルを外し、乱れた髪を撫でつけている真朱の態度に、ノートは肩をすくめる。

しかし、いつものことなのか。それ以上は何か言うことはなかった。

「乗れよ。嫌なことは、さっさと片付けたいんだ」

「は、はい……でも」

サイドカーの座席から取り上げたヘルメットを、押しつけるように差し出す真朱に頷いた。でも、カチは地面から浮いているバイクが気になって、歩み出せない。

「大丈夫だよ。浮いているからって、空を飛ぶわけじゃない。まあ、走行中に落ちたら怪我だけじゃ済まないかもしれないけどな。おとなしくしてりゃ、落ちることなんてないさ」

鈍色のパイプが組み合わさって作られているエンジン。更に、機関部に動力を送るソーラー・パネルを真朱はこつんと叩いてみせた。

「タイヤだと色々と不都合がでるんだ。ゼタフロートの地面はいくら丈夫な素材で作られていたって、結局、ブロックだからな。タイヤで踏みつけていけば、痛みも激しくなる。だから、車両はみんな浮いているんだ」

人差し指を地面に向ける真朱に、カチは自分の足元を見つめた。

ブロックを繋ぎ合わせて作られているには滑らかだ。海に浮かんでいると思わせないほど揺れを感じさせない。

高いビルも聳えているのだから、不思議だ。

「それに、地面から浮いているぶん、揺れが少なくて、乗り心地は最高だ。……だから、早く乗れ。オレの運転に間違いはないよ」

「あ、はい……」

投げつけられたヘルメットを受け取り、カチは被ろうとした。そこで、耳を覆うサイレンスが邪魔なことに気づいた。

「あの……」

「外して首に掛けておけ。四の五の言わずに、早くメットを被れ。サイドカーに座って、街でも眺めてる。あつという間に、目的地に到着だ」

取り付く島もなく一方的に言う真朱に、カチは頷くしかない。おとなしくヘルメットを被ってサイドカーに乗りこんだ。

エンジンの微動が少し気になるが、革張りのシートは柔らかく、座り心地は割と良かった。

「安全運転でお願いね、真朱」

「行ってくる」

真朱は愛想なく言って、ゴーグルを装着した。グリップを握り、前傾姿勢に構えた。瞬間だった。

不意に振動が強くなった。カチは襲いかかってくる衝撃に驚き、声になりきれない悲鳴を上げた。胃が冷えるような恐怖に、シートをぎゅっと握りしめる。

空気が風となって、顔にぶつかり。弾けてゆく。

緩やかな午後の雰囲気を醸し出していた街並みが、慌ただしく視界を流れ去る。目が回るような光景に、カチは圧倒された。

「さて、乗り心地は、どうだ？」

風を切って走るバイク。顔にのし掛かってくる風圧に、カチは何も答えることはできない。馬鹿にするようにほくそ笑む真朱を恨めしく睨むのが精一杯だった。

カチが驚いている間に、真朱が駆るバイクは市街地を抜け、高層ビルの合間を走る高速道路を突き進んでいた。

幅が広く取られた道路には、バイクと同じように低空浮遊している車が走っている。

「びっくりしました」

「そりゃあ、いい」

速度を落としたのか、カチは息を塞ぐほどの強風から解放された。ほっと息を吐き、改めて周囲を見回す。

環境保護機関から見上げた空は、更に近い位置にある。宇宙ステーションの壁面の凹凸がくつきりと見えるほど、大気は澄んでいた。「世界は、どうなってしまったのですか？」

様々な色のライトが点滅し、地球と流れ星のマークが描かれているステーションには、赤い塗料で、区画を表す記号と数字が書かれてあった。

カチの記憶の中にあるものとは、たしかに違うようだ。

「滅んだのか……生まれ変わったのか。まあ、俺には、あまり関係ないさ。生まれる前の話だからな」

カチは強風に煽られる長い髪を両手で押さえた。

神妙な気持ちになって、作り物とは思えない浮島を取り囲んでいる深い海の色を見つめた。

(全てが、夢のよう……)

高層ビルが乱立し、編み目のように張り巡らされた道には、たくさんエアカーが行き来している。

カチは眼前で蠢く、人の世界の力強さに圧倒された。

しかし、それ以上に、箱庭のような文明を取り囲んでいる空と海の大きさには、啞然とした。

あまりの質量に、カチは海の中にいたことすら忘れてしまうくらい、漠然とした恐ろしさを感じていた。

「あれは、なんですか？」

恐怖に飲まれまいと視線を外し、カチは左手方向に聳え立つ銀色の尖塔を指さした。

晴れ渡る空を突き刺さんばかりに伸びる左手の尖塔は、日時計のように長細い影を、混雑した街並みに落としていた。

「アルビレグムの生命線だ」

どういうことかと首を傾げれば、真朱は自分のこめかみを、コーグルのバンドの上から突いてみせた。



「設置型の大径思念遮蔽装置。お前が首に掛けているサイレンスミ  
たいなもんだよ」

無感情に、素っ気なく答える真朱の横顔を見上げる。

唐突に、胸が締め付けられるような息苦しさで軽い頭痛を感じた。  
カチは眉を顰めて、こめかみを押さえた。

脳裏をかすめる強烈な感情にわけが分からず、カチは戸惑った。

真朱は、カチの様子に気づいていないようで、話を続ける。

「海からの精神汚染を防ぐために、特殊な波形の脳波を人工的に作  
り出して発信しているんだ」

真朱の言葉に、カチは信じられない思いで穏やかな海を見つめた。

「海から……汚染される？」

確かに、広大な海は飲み込まれてしまいそうなほど雄大だった。

美しさと同時に、恐ろしさも感じた。

しかし。太陽光を反射する水面はひたすら穏やかに見える。襲  
いかかってくる類のようなものには、とうてい思えなかった。

「この地球上で最も変質したのは、海だ」

カチの疑問を振り払うように言った真朱は、エンジンを吹かし、前  
方に行く車両を次々と追い越してゆく。

振り落とされてしまいそうな猛烈な勢いに、カチはサイドカーの  
手すりを必死になって握りしめた。

シートにちゃんと座ってさえいれば、放り出されることはないの  
だろう。だが、慣れないスピードは、とにかく恐怖心を煽る。

「誰もが海を恐れている」

「海を……？」

なぜ、と問いかけて、カチは背筋を引っ掻く悪寒に息を呑んだ。

俗に言う、嫌な予感というものか。

カチは感覚を辿って視線を泳がせ、背後を振り返った。

「あれは、なんでしょうか？」

いつから底にいたのか、猛烈な早さで駆けてくる一台のバイクを  
見つけた……瞬間だった。

甲高いエンジン音を引き裂いて、破裂音が青空に響きわたる。

「何だ！」

せっぱ詰まった真朱の声。

「なんですか、この音！」

フルフェイスのヘルメットを被る、黒革のボディースーツを着たライダーは、女だろうか。

スレンダーでありながらも丸みを感じさせる姿態で、漆黒の大型バイクを華麗に捌ききっている。

「伏せている！」

真朱の怒鳴り声と共に、バイクが速度を上げた。

カチは反応が遅れ、振り返ったままの体勢でつんのめった。危うくサイドカーから転げ落ちそうになって、冷やりとする。

目の前を高速で流れてゆく道路に擦られては、たまったものではない。

「なんなんですか、いったい！」

シートに俯せになるように屈み、カチは迫りくるバイクを恐れ見えない。二つのバイクの車間距離は一進一退。どちらも決して引くことはない。どこまでも続く高速道路上を猛進してゆく。

「さあな。友達じゃないことだけは確かだね！」

「お友達、いないんですか？」

背中から押しつけられるような風圧に声を荒げて問うと、真朱の舌打ちが返された。

「いなくはない。多くはないがね」

バイクはエンジンを唸らせ、突き進んでいく。

前方には海を横断する巨大な吊り橋が待ち受けていた。

抜け道のない一本道では逃げる場所はない。互いのバイクの性能とライダーのテクニックに賭けたスピードレースを繰り広げるしかない。

塔の間にメインケーブルを渡し、そこから伸ばされるハンガーロップによってつり下げられている通常の吊り橋とは違っている。

海から突き出る二本の塔と、橋桁をケーブルで直接つながれた斜張橋の姿に、カチは既視感を覚えた。

「……横浜ベイブリッジ？」

何本ものケーブルの隙間から吹き付けてくる風の音を聞きながら、カチは追われていることを一瞬だが忘れ、橋に見入った。

「似せて作られたものさ」

素っ気なく言つて、真朱は更にスピードを上げた。

後続の黒いバイクも、エンジン音を唸らせ、追い掛けてくる。

制御不能に陥る一歩手前の高スピードで橋を横断する二つのバイクに従ってこられる車は皆無。

むしろ、切迫した雰囲気を感じ取つてか、車のほうから彼等に道を空けていた。

対向車すらも恐れ、スピードを落として成り行きを見守るばかり。四車線の巨大な道は、即席のサーキットと化した。

「あの、ますおさん！」

「まそおだ！ 何だよっ！」

振り返る余裕も、まともに答える余裕もないのか。怒鳴り声だけが返ってくる。

「あの人！」

カチは、猛追してくるバイクのライダーが、グリップから右手を離すのを見て驚いた。

「まじかよ！」

サイドミラーで見たのか、真朱も驚愕の声を上げた。

まともに動かすのすら難しい大型バイクを、あの細い体型で操っていることでさえ奇跡に等しい。まして、片手で捌ききれるようなものではありえない。

だが、制御を離れた漆黒のバイクは、転倒はおろか、減速すらもしなかった。

獲物を狩る獣のような、獰猛で執拗過ぎる猛追を見せ、追いかけてくる。

「くそっ！」

真朱は悔しげに舌打ちをした。徐々にはあるが、距離を詰められている。

けっして、真朱が劣っているわけではない。マシンの性能的にも、それほど違いがあるようには思えない。

たんに、側車が付いているか付いていないかの差だろう。単車である分の身軽さが、僅かな優勢を作っているにすぎない。

「屈めと言っているだろう！ 死にたいのか！」

「でも！」

「お前にできることなんて、なにもない！」

確かに、真朱の言うとおりだ。カチには、この状況を打開する術はない。

言われたとおりに大人しく、体を小さくしているべきなのはわかる。だが、わかっていてもカチには、指示に従うことができなかった。

自分の中にある「なにか」が、追撃者から目を離すことを許さなかったのだ。

（何？）

ぞくりと、背筋が粟立った。

感覚が示すまま、カチはライダーをさらに注視した。肌がぴりりと乾くのは、危険を感じとっているからに違いない。

手を差し伸べるように、真っ直ぐに伸ばされる右手には拳銃らしき武器が握られている。

「ます、真朱さ……！」

車体を揺るがす衝撃。カチは眼前で爆ぜる火花に飛び上がった。

「さすがに、当てられないか。いや、むしろ警告か？」

「どうして、あの人は？」

銀色の車体についた弾痕を見つめ、カチは震えた。死の恐怖を突きつけられたようだ。

「いきなり撃つてくるような馬鹿は、旧人類解放運動同盟ぐらいだ

ろくな」

もうすぐ橋が終わる。

通常の高速道路に戻れば、一般道へ繋がる道に出ることもできる。交通量が更に増す一般道なら、漆黒のバイクの追撃をやり過ごすこともできるだろう。

だが。

後方から響く轟音に、橋を支えるワイヤーが水揚げされた魚のようには跳ねる。

「嘘だろう!」

啞然とした真朱の呟きは、横手を駆け抜ける漆黒のバイクのエンジン音に掻き消された。

限界以上の力を引き出された大きなエンジンからは炎が吹き出し、車体のほぼ半分を燃やしたまま、漆黒のバイクはカチ達を追い越して車線に割って入った。

甲高いブレーキ音。

漆黒のバイクは車体を橋桁にこすりつけながら、滑るように力業でターンする。二台のバイクが、正面から向かい合った。

「真朱さん!」

フルフェイスのライダーは炎上する車体に構わず、銃を構えた。鈍色の銃口は、バイクを駆る真朱にしっかりと向けられている。

「……まずい」

真朱はバイクを停止させることも、銃弾を避けることもできなかつた。

スピードがつき過ぎていて、下手に動かせばバランスを崩して転倒しかねない。しかし、止まれば狙われる。

どうにもならないと、苦い表情を浮かべる真朱のこめかみに冷や汗が流れた。

「真朱さん!」

発砲音が響き、銃口から弾丸と共にマズル・フラッシュが迸る。バイクとは比べものにもならない早さで宙を駆ける弾丸が、真朱

へと襲い掛かった。

「ダメ！」

風とは別の作用によって、カチの長い髪がたなびく。

「馬鹿、こんな所で！」

カチは世界が揺れるような感覚に襲われ、息を呑む。

橋桁を勢いよく突き破り、青い……海水の柱が、迫り来る銃弾を飲み込んで目の前に現れたのだ。

「くそっ」

真朱が駆るバイクは、吹き上がる水柱に突っ込む寸前で、急停止した。

「わたし？ わたしが、こんなこと？」

噴水のように勢いよく吹き上げるさまを呆然と見上げるカチに、海水が雨となって降りそそぎ、空から降りそそぐ太陽光の屈折によって水柱の周りに眩い虹が架かった。

「あの人が、いない？」

吹き上げたときと同じ勢いで、海水は舗装に生じた亀裂に吸い込まれ、海へと消えた。

べたつく潮に不快感を覚えながら、カチは青い空の下で虚しく炎上するバイクを見つめ、眉をひそめる。

フルフェイスのライダーの姿がどこにもないのだ。忽然と、カチと真朱の目の前から消えてしまっていた。

「なんだってんだよ！」

まるで狐に化かされたような、もどかしい感覚。バイクの計器を叩いて歯噛みする真朱をカチは見つめ、次いで、近づいてくる轟音に空を仰いだ。

「真朱さん、あれは何ですか？」

空を揺るがす轟音は、プロペラの回転音だった。

「くそ、騒ぎを嗅ぎつけてきたか。……これを被ってる」

どうして？ と聞く間もない。真朱の上着が頭から掛けられる。

海水を被っているために、べたついて気持ちが悪い。撥ね除けよ

うとして、吹き付ける風に上着が飛ばされそうになった。カチは反射的に強く掴む。

「ヘリコプター？」

「報道だ。これだけ騒ぎを起こせば、来ないほうがおかしいか。……くそ、面倒だな」

大きな穴が穿たれた橋の上空。旋回しているのは、小型のヘリコプターだった。

飛んでいるのにもかかわらず、開け放たれた扉から身を投げ出して、カメラを回している。

「いいか、姿を見せるんじゃないぞ」

「どうしてですか？」

真朱の顔を見ようと、上着を取ろうとして、すぐに大きな手で頭ごと押さえられた。

「アンピトリテがふらふら出歩いているって知られてみる、四六時中知らない奴等に追い回されるぞ。悪いが俺は、そこまでお守りはしてやれないぜ」

嘆息して、真朱はバイクの計器についているボタンを押した。

「ノート、応答しろ」

『ちよつと、あなたたち！ 何やってるのよ！』

「わっ！ ノートさん？」

甲高い怒声が響く。

「話は、あとだ。日本国庁舎に連絡を取って、迎えを呼んでくれ、バイクがダメになった」

『まったく、もう！ 大変な騒ぎになっているのよ！』

「始末書なら、いつもどおり書いてやるから、早くしろ」

『……わかったわよ』

渋々といった調子でノートは承諾した。

真朱は通信を切り、炎上を続けるバイクを睨み付けた。

カチもまたサイドカーに座ったまま、燃えさかる炎を呆然と見つめた。次いで、自分の白い手を見下ろす。

今にも折れてしまいそうな細い手……体。  
挟られた舗装の穴から見える海の青が、なぜか力手には、とても  
恐ろしいものに見えた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9815w/>

---

青の住人

2011年9月27日08時10分発行